

何ものかが、ひとつの“決断”として選び採られたものである以上、人々にはその答えを選択した責任があるということを、彼らはよく知っているのである。

そしてわれわれには、もうひとつ忘れてはならないことがある。それは人間存在にとって“生きる意味”というものがあるのだとすれば、それは〈無限の生〉からではなく、〈有限の生〉からこそ発生するということである。繰り返すように、われわれの〈生〉には、根源的に哀苦や残酷さがつきまとう。逆に言えば、哀苦や残酷さを伴わない〈生〉など、過ぎ去った時代のなかにも、この先の未来のなかにも、永遠に見つけることなどできないだろう。しかしだからこそ、われわれは思い返すべきなのである。例えばわれわれが、おのれの命をつなごうとして別の命を絶たなければならなかったからこそ、そこには命に対する畏敬と祈りが育まれてきたということ。また、この命が自らの意思ではなく一方的に与えられたものだったからこそ、「私」は世界に位置づけられ、〈この私〉というものでいられたということ。目の前の他者が、負担を伴う「意のままにならない」存在だったからこそ、何かが分かち合われたその瞬間、そこに代えがたい喜びがあったということ。〈悪〉やわざわいに脅かされ、それを封じることが困難であったからこそ、そこには皆で結束し、協力していく意味が芽生えたということ。そしてわれわれは、必ず死に至り、決して未来を知ることができない。しかしだからこそ、われわれは〈存在の連なり〉に思いを馳せ、未来に何かを託そうとしてきたのだということ。もしも人生が“無限”であるならば、いまこのときを待たずして、誰かが何かをやり遂げる意味などない。あるいは面前にある〈関係性〉が、そして〈この私〉が、かけがえのないものになることもないだろう。無限の世界に、意味など存在しない。われわれが〈有限の生〉を生きるからこそ、人生には意味が芽生えてくるのである。

## （6）〈世界了解〉①——人間の〈救い〉について

〈有限の生〉とともに生きるということ——それが、本書が長い考察の末に到達した答えであった。とはいえわれわれの議論には、おそらくまだ不足してい

るものがある。それは、〈有限の生〉とともに生きるための“術”に関わるもの、われわれが〈有限の生〉を肯定していくための、手がかりとなるものについてである。

ここでわれわれは、まず人間の〈救い〉というものについて考えてみよう<sup>(55)</sup>。一般的な辞書によれば、“救い”とは「すくわれること、たすけること」、「加勢、助勢」、「希望や明るさを感じさせて気持ちをほっとさせることがら」などであるとされている<sup>(56)</sup>。しかしここで問題にしているのは、あくまで人生における〈救い〉、すなわち人間が生きることの〈救い〉についてである。〈有限の生〉の内実を思えば、それが少なくとも「希望や明るさを感じさせて気持ちをほっとさせる」などと表現できるものではないということだけは分かるだろう。では、改めて人間の〈救い〉とは何だろうか。

このことを考えていくために、われわれはひとつの「寓話」から始めよう。

あるところに、一代で巨大な帝国を築いた皇帝がいた。皇帝は富や権力をほしいままにしていたが、ただひとつだけ手に入らないものがあつた。それは“永遠の命”である。年老いた皇帝は、滅びゆく自身の肉体を悲しみ、臣下に向かって“不老不死の薬”を探し求めるように命じた。ところが臣下はいつになっても戻らない。焦った皇帝は、伝え聞いた噂から、異国の神を祀れとあれば豪華な神殿を建造し、乙女の生き血が効くとあれば、国中から乙女を集めて首をはねた。そして毎日のように臣下の帰りはまだかと嘆き、暴れて回るために、周囲の人間たちからは「早く死んでくれたら」と影でささやかれながら、ついに息を引き取つたという。

われわれはこれまで繰り返し、与えられた自身の〈生〉を全うすることの意義について論じてきた。その意味においては、確かに「皇帝」は、波乱に満ちた自らの〈生〉を全うしたと言えるだろう。問題は、この「皇帝」の人生において、はたして人間の〈救い〉はあつたのかということである。「皇帝」の事業は確かに偉大であつた。それでも晩年において、彼の心は荒廃し、そこには一切の平穏がなかつたと言える。「皇帝」は、死すべき自身の運命を憎み、そうし

た運命を与えた天を憎み、そして自らを忌み嫌う周囲の人々を憎みながら死んでいった。そこにはおそらく、人間の〈救い〉はなかったのである。だが、この「皇帝」の苦しみは、言ってみれば自縄自縛の苦しみではなかっただろう。それは「意のままにならない生」の現実を否定し続けた、あの「皇帝」が自ら招いたものだったからである。

この「皇帝の寓話」は、なぜ〈無限の生〉というものが、人間の〈救い〉とは対極にあるものなのかということのをわれわれに教えてくれる。というのも、〈無限の生〉に囚われた人々の苦しみは——価値理念が実現しないからといって現実を否定し続けたあの理想家たちの苦しみから、「脳人間」に到来した、あの“退屈”という名の恐るべき虚無に至るまで——この「皇帝」と同じく、自縄自縛の苦しみだからである。とはいえ、ある人々は次のように言うかもしれない。もしも人間の〈生〉が、根源的な部分で哀苦や残酷さに満ちているのだとすれば、われわれがたとえ〈有限の生〉を生きたとところで、結局救われることなどないだろう。人間の〈救い〉など、結局どこにもないではないかというようにである。確かにわれわれは、人間的な〈生〉の哀苦や、残酷さからは決して逃れることができないと言える。しかし本書では、それでもなお、次のように主張したい。人生の〈救い〉というものがあるとするなら、それは依然として哀苦や残酷さを含んだ〈有限の生〉を肯定することそれ自体のなかにある、というようにである。

もっとも、このことを理解するためには、ここでの「肯定」が意味するものについて、われわれはより深く掘りさげていく必要があるだろう。最初の手がかりとなるのは、かつてE・キューブラー＝ロス(E. Kübler-Ross)が述べた、終末期患者が自らの現実を受け入れるまでにたどるとされる、「否認」(denial)、「怒り」(anger)、「取り引き」(bargaining)、「抑鬱」(depression)、「受容」(acceptance)という五つの段階である<sup>(57)</sup>。注目したいのは、このことが終末期患者に限らず、多かれ少なかれ、人々が「意のままにならない生」の現実と直面した際に示す、一般的な反応であると言えることである。例えば不本意な〈生〉の現実と出会うとき、人々は最初、その現実がもたらした「裏切り」を受け入れることができない。しかしそれが間違いではないということが分かると、今度はそ

うした現実が自身に訪れたことに対して憤慨することになる。そして何かを代わりに差し出すことで、その現実を変更しようと試み、それがどうにもならないと悟って、ついには嘆きと悲しみに暮れるのである。このとき、その人の苦しみの度合いは、その現実がその人の存在にとって重大な意味を持つものであるほど大きなものとなる。そして人々が、それを本来的に「意のままになる」べきものだ<sup>1</sup>と確信していたのだとするなら、その苦痛はよりいっそう大きなものとなるだろう。しかしこの段階を乗り越えると、やがて怒りや抑鬱は背景へと退いていく。そして人々はあるがままの現実を、あるがままのものとして受け入れるようになるのである<sup>(58)</sup>。

こうしたある種の段階は、おそらく〈有限の生〉の「肯定」についてもあてはまる部分があるだろう。しかし問題となるのは、この「あるがままのものとして受け入れる」ということに含まれている、より根源的な何かである。そしてその手がかりとなるのは、われわれが【序論】で述べた、人間的世界における〈思想〉の存在理由、すなわち人間存在は、根源的に世界を了解し、他者を了解するための意味と言葉を必要としているという前提である。前述したように、人間はその存在の始原において、根源的に不可解で「意のままにならない」世界に投げだされ、同時にそこで、同じように不可解で「意のままにならない」他者とともに生きていくことを余儀なくされる。ここで人々が求めているのは、そうした自身を取り囲んでいる、「意のままにならない身体」をも含んだ物質的な世界への了解とともに、「意のままにならない他者」との〈関係性〉をも含んだ、非物質的な世界への了解であると言えるだろう。本書では、それらを包含する形で〈世界了解〉と呼ぶことにしたい。すなわち〈世界了解〉とは、他者を含んだ「意のままにならない」この世界そのものに対して、あるがままのものを、あるがままのものとして一度は受け入れるという意味のあり方のことである。つまり〈有限の生〉を「肯定」ということは、突き詰めて言うなら、ひとりの人間存在が、こうした根源的な人間の宿命を受け入れていくこと、この〈世界了解〉を成し遂げていくことを意味しているのである。

したがって、ここでわれわれに残された問いは、次の二つとなるだろう。ひとつは、現代を生きるわれわれが、いかにしてこの根源的な〈世界了解〉を達

成することができるのかということ、もうひとつは、この〈世界理解〉を実現することが、なぜ人間の〈救い〉と結びつくのかということである。ここでわれわれは、例えば古に生きた人々が、なぜ何ものかを神と呼び、この世界に人智を超えたよるずの物事を見いだしてきたのかということのを思いだしてみる必要がある<sup>(59)</sup>。それは彼らが、いわばそうしたものを仲立ちとして、この〈世界理解〉を成し遂げようとしてきたからではなかつただろうか。つまり人間存在が生みだしてきた多くの言葉、多くの意味は、より良き〈生〉を生きるための知恵であると同時に、〈世界理解〉を達成していくための知恵でもあったのである。確かに現代を生きるわれわれの目には、もう古の人々には見えていた、あの人智を超えたよるずの物事は映らないのかもしれない。しかしわれわれにあっても、〈世界理解〉を促し、それを支えていく術は確かに残されているはずなのである。

おそらく〈世界理解〉の出発点となるのは、まずはその人自身が、この世界の現実に一歩踏みだしていくことであるだろう<sup>(60)</sup>。〈世界理解〉は、たとえそれが不完全なものであっても、その人が現実と対峙しようと試みるならば、その格闘の事実によって支えられるからである。価値理念を盾に、闇雲に現実に立ち向かうわけでもなく、また卑屈な「諦め」によって、現実を蔑ろにするわけでもない<sup>(61)</sup>。何かに負い目や引け目を感じようとも、移りゆくこの世界の片隅で「意のままにならない生」を生き抜こうとする構え方、それ自体がその人を強くするからである<sup>(62)</sup>。われわれは先に、人生が有限であるからこそ、そこには生きる意味が生じてくるのだと述べた。そのことが示唆しているのは、真に人を動かす意味があるとすれば、それは何ものかによって与えられるものでも、論証によって解明されるものでもない、現実との格闘のなかで、本質的におのれ自身が見いだすべきものであるということだろう。

次に〈世界理解〉を支える第二のもの、それはおそらく同じ世界と向き合う“他者”の存在である。もっともそれは、親密な何ものかによる「この私」への無条件の承認などといったものではないだろう<sup>(63)</sup>。現代人が逃げ込む「自分だけの世界」は、「かけがえのないこの私」の聖域であると同時に、自縄自縛の牢獄でもある。それを打ち破る力になるのは、「意のままになる他者」ではなく、

あくまで「意のままにならない他者」の存在だからである。「不介入」に慣れてしまったわれわれの目には、そうした他者が、ときに「この私」を針で傷つけ、笑いながら足蹴にしてくる怪物のように映るかもしれない。それでもその人が、負担を伴う〈共同〉を引き受け、そのなかで〈役割〉や〈信頼〉や〈許し〉の経験を積み重ねていくことができるのならば、その経験によって、おそらくその人は強くなる。大事なことは、人が何かを背負おうとするからこそ、〈役割〉は意味を持つのだということ、〈間柄〉を引き受けつつも、人が「〈我-汝〉の関係性」として向き合おうとするからこそ、そこには〈信頼〉が育っていくのだということ、そして人が誰かを〈許そう〉とするからこそ、やがてはその人自身もまた〈許される〉のだということである。移りゆく世界のなかで、それらは確かに永続的なものではないかもしれない。「素朴な〈悪〉」や人心の巡り合わせによって、そのすべてが成功するわけでもないだろう。しかし、そうした変わりゆくものを見守っていく姿勢もまた、おそらく〈世界理解〉の一部なのである。そしてだからこそ、われわれは思うべきだろう。たとえ何かが終わりを迎えようとも、たったひとときであれ、そこにかげがえのないものがあつたとするなら、それは偽りではなく、おのれだけのささやかな真実であると。

こうしてわれわれは、再び〈存在の連なり〉に思いを馳せることになる。〈世界理解〉を支える第三のもの、それはこれまで生きて死んでいった無数の人々の〈生〉、そしてこれから生きることになるだろう無数の人々の〈生〉のなかに位置づく、〈自己存在〉というものへの深い理解だからである。このことを考える手がかりとなるのは、人間存在における“死”とは何かという問題である。例えば〈無限の生〉の住人たちは、いまでも快楽を貪り、偏狭な自己を実現していくことだけが生きる意味であると考えている。そうした人々にとって、苦しみで満ちた〈生〉など、そもそも生きるに値しないもの、そして“私の死”とは、「かけがえのないこの私」が終焉を迎えるという意味において、絶対的な不幸となるだろう。

だが、人間存在にとっての“死”とは、はじめからそのようなものとして理解されるものだったのだろうか。はたして本当に、誰もがあの「皇帝」のように、不死を願って生きてきたなどと言えるのだろうか<sup>(64)</sup>。例えば近代的な医療

が普及する以前の時代、栄養失調や伝染病、事故や天災などによって人間は簡単に死に至った。十分な健康と安全が得られないなかで、悲惨な光景が至る所に見受けられた。そうした世界にあって、人々が生きようとしたのは、損得勘定によって「苦しみよりも快樂が勝った」からだったのだろうか。あるいは彼らが心から「生きたい」と自己決定したからだったのだろうか。そうではあるまい。人が生きたのは、むしろ「生きなければならなかった」から、つまり自らの意思とは関係なく、「この世に生まれてしまった」からではなかっただろうか。人は「生まれてしまった」以上、そう簡単に死ぬことなどできなかつた。例えば人間は、この世界に誕生したそのときから、有限な存在としての何かを背負うことになる。「意のままにならない身体」を背負い、同時に「意のままにならない他者」との〈関係性〉を背負うことになる。そして否応なく、あの〈存在の連なり〉のなかに位置づけられ、さまざまな縁のもと、自らが負うべきものたちと出会ってしまうのである。だからこそ、おそらく人は死ぬことができなかつた。生きようとして、格闘しなければならなかつた。だがいずれは運命が、その人に有無を言わず死を与える。それは、〈連なり〉のなかで生かされていく人間が、同時に有限な存在としての負うべきものを全うし、その責務からついに解放されるということをも意味していたのである。

それゆえ、人間が生きることを「この私」が生きることだと履き違え、限りあるものを偽りの永遠によって糊塗しようとする人々には、繰り返し死者のための墓標を立て、葬儀を営んできた人々の、そして行き倒れた見ず知らずの人間でさえ用おうとしてきた人々の思いなど知るよしもないだろう<sup>(65)</sup>。われわれはここで思いだすべきである。人間が「〈生〉の舞台装置」としての〈社会〉を生みだして以来、われわれの〈生〉は〈社会〉を介して途切れることなく続いていくものとなった。そのとき人間的な〈生〉は、「この私」という個体によって根源的に完結しないもの、〈存在の連なり〉の網の目のなかで立ち現れてくる〈この私〉として生きることを意味するようになったのである。だからこそ人間存在にとっての死は、一般的な生物存在とはまったく異質のものとなる。人間的世界においては、たとえ肉体が減じようと、たとえその人の記憶が忘れ去られようと、その人が生きて何かに働きかけた事実の痕跡、あるいはその人が創

出した意味や言葉の痕跡は、〈連なり〉の片隅に確かに刻まれ、〈連なり〉のなかに永劫残されていくことになるからである<sup>(66)</sup>。実際、われわれを取り囲んでいる「社会的なもの」とは、まさにそうした幾百億もの過去の人々が生と死を介して刻んできた痕跡そのものではないか。だが、これは同時に恐ろしいことでもあるだろう。なぜなら〈存在の連なり〉を生きるということは、たとえわれわれがいかなる生き方を選択しようと、その生きた痕跡が否応なく世界に刻まれてしまうということをも意味しているからである。

このことを思えば、自意識に彩られた「この私」や「自分だけの世界」というものが、いかに狭小なものであるのかが分かるだろう。はたしてわれわれは、その〈自己存在〉の始原にあって、同時にその先へと続いていくもの、原始より途切れることなく続いてきたその果てしない営為を〈信頼〉することができるだろうか<sup>(67)</sup>。人が生きることの哀苦や残酷さを前にして、これまで生きて死んでいった無数の人々の〈生〉、そしてこの世界でこれから生きていくはずの無数の人々の〈生〉を、〈信頼〉することができるだろうか。〈存在の連なり〉を生きる〈この私〉というものを覚悟するとき、はじめてわれわれは、真に「担い手としての生」を生きられるようになるだろう。そこにある「人間という存在に対する〈信頼〉」、それが〈世界了解〉を成し遂げようとする人たちの心を勇気づけるからである。

そしてこのことは、人生の〈救い〉というものが、なぜ〈有限の生〉の肯定と〈世界了解〉のなかにこそあると言えるのか、ということをわれわれに教えてくれる。なぜなら、この〈世界了解〉へと至る道の先にこそ、おそらく「自己への〈信頼〉」と呼べるものが存在するからである<sup>(68)</sup>。われわれが必要としているのは、「かけがえのないこの私」を肯定することでも、偏狭な自意識を誰かにありのまま受け止めてもらうことでもない。求められているのは、人間が生きることの哀苦や残酷さを前に、なお現実と対峙していくことができる、人間としての自信だからである。それは、他者とともに〈生〉を実現していく主体としての自信、困難を前にして自分自身に大丈夫だと言ってあげられる心の強さだからである。それらを支えてくれるのは、この世界に一步踏みだしていく勇気と、〈共同〉を通じて積み重ねられた〈役割〉や〈信頼〉や〈許し〉の経



験、そして〈存在の連なり〉のなかで「担い手としての生」を生きる覚悟とによって形となった、〈自己存在〉に対する自分自身の〈信頼〉に他ならない。それゆえ、本書では改めて主張しよう。この時代に生きる、人間存在の〈救い〉とは何だろうか。それは〈世界理解〉を達成しようと格闘するなかで、「自己への〈信頼〉」へと至ること、そしておのれに与えられた〈有限の生〉を引き受け、運命が解放するその日まで、それを全うしていくということに他ならないと。

### (7) 〈世界理解〉②——人間の〈美〉について

最後にわれわれが見ていくのは、人間存在にとっての“美”の問題についてである<sup>(69)</sup>。長い議論の果てに、なぜわれわれは美について論じなければならないのだろうか。それは「美しく生きる」ということが、〈有限の生〉とともに生きる術、われわれがより良き〈生〉を模索していくための、ひとつの手がかりとなるからである。したがって、ここで考察したい〈美〉とは、例えばわれわれが何かの情景や芸術(作品)を捉えて「美しい」と感じるような、「鑑賞としての美」のことではない。ここでの〈美〉とは、もっぱら人間存在を対象とし、ある人々の〈生〉のあり方、あるいは自らの生き方をもって「美しさ」を論じる目ざしのことを指している。本書ではそのことを、「生き方としての美」と呼ぶことにしよう。

もっとも、こうした〈美〉の内実について踏み込んでいく前に、われわれは美というものをめぐる、一般的な議論について確認しておく必要があるだろう。というのも、現代社会の美的状況においては、美とはもっぱら「鑑賞としての美」のことを指し、「生き方としての美」については、およそ美の問題とは見なされていないということ、他方で「現代アート」(contemporary art)の氾濫によって、これまで美を独占してきたはずの芸術領域においてできえ、「美そのもの」が解体され、われわれはある種の「美的アンノミー」とも呼べる事態に陥っているように見えるからである。

実は歴史を遡れば、「生き方としての美」という概念は、近代以前の思想にお